

イタリア史というのは、日本の西洋史学界の中ではメジャーな分野とは言い難い。就中、中世・近世史となると、更に研究者の数が減る。それでもイタリアにひかれ、中世史・近世史の研究を続ける研究者諸氏への共感を込めて、我々の置かれた研究状況を少し考えてみたい。

イタリア中世・近世史学でも、他の地域の歴史学の動向をも反映して、種々の分野での研究が進んでいる。都市（都市間）の経済、制度・政治、社会構造、またエウジェニオ・ガレン Eugenio Garinの研究に代表される思想・文化史などの従来分野に加え、家族、女性、子供、更に犯罪、外国人などに関する研究も見られるようになった。但し、イタリアという国家形態の存在しない時代を対象とする為、広い視野を持つ研究でも、実際の分析は概して一都市、或いは一地方中心の郷土史的な性格を持つ。

このような研究上の地域性は、中央集権の進んでいない前近代の歴史を研究しようとするれば、多かれ少なかれ、ヨーロッパのどの地域、国についても見られることと思うが、イタリアの場合、特にそれが甚だしい。通常、フィレンツェ史の研究者 — 大学・研究機関に属する専門家たると在野の郷土史家たるとを問わず — が、ジェノヴァ史についても関心を持っているということは、少ない。ヴェネツィア史の専門家に、ナポリ史研究の現状を尋ねても、あまり有益な回答を期待はできないし、ミラノ史の研究者が、国外で発表されたミラノ史の研究までも丹念にフォローしていても、イタリア国内でのポローニャ史研究の状況については良く知らないということは、あり得ることである。勿論、彼らは、自分の研究対象としていない地域に関しても、新しい研究などに目配りをしているし、地域間を比較する観点が見られない訳でもない。だが、概説的なものを別にすれば、各地方・各都市の個別研究が著しく独立している。全く異なる歴史を有する都市・地域を一様に論じることが、困難なのは確かである。敢えてそうしようとすれば、概説の域を出ないであろう。しかし、それ以前に、フィレンツェのように大きな都市の図書館でも、その地元の地域（即ちフィレンツェと、これを含むトスカナ地方）に関する研究書・雑誌の多さ（国外の研究もよく集められている）に比べて、他の都市・地域に関するものの所蔵数は少ない。それぞれの地域の歴史はそれぞれの地元で研究するべきであるという姿勢が、ここに窺われる。それ故、例えば、フィレンツェ在住のヴェネツィア史研究者などというものには、ついぞお目にかからない。

さて、現在、日本で最も著名なイタリア中世・近世史研究者と言え、やはりカルロ・ギンズブルグ Carlo Ginzburgであろう。去る1992年にも来日しているし、彼の提唱するミクロストリアは、『チーズとうじ虫』や『ベナンダンティ』、『闇の歴史』などの翻訳書、『思想』（1993.4）掲載の論文等を通して、イタリア史以外の学生・研究者にも知ら

れている。実証的な史料研究に基づき、巨視的な歴史観に配慮しつつ、微視的な観点から社会の深層を探ろうとする彼の方法論は、我々に多くの示唆を与えてくれるものである。但し、ギンズブルグ自身はイタリアでも著名であるが、その方法論が、イタリアの歴史学界の大勢を占めている様子はない。ギンズブルグ等の業績は評価しつつも、従来の観点・方法を尊重しながら研究を続けているのが、大学、研究機関、在野を問わない多くの研究者の姿勢のようである。尤も、ギンズブルグ自身が述べているように、また前述の『思想』誌上で二宮宏之氏が指摘している（前掲誌 p. 3）ように、ミクロストリアの視点は、大局的な視点から社会を見ていこうとする従来の歴史学（マクロストリア）への批判・反省から生じたものであっても、これと正面から対立するものではあるまい。ギンズブルグの方法論は、様々な歴史学の方法論のうちの一つということなのである。

一方、イタリアでも社会史的な観点での研究に関心が向けられてはいるらしい。殊に、南イタリアのバーリに本拠を持つLaterzaという出版社は、ル=ゴフやル=ロワ=ラデュリ、デュビオをはじめとする所謂アナル学派の著作を盛んに翻訳・出版している。これらの翻訳書の読者がどのような層なのかという点については、残念ながら判らないが、なかなか良く売れているようである。専門的研究や論文集、雑誌論文などを見ても、社会史的観点を取り入れたものがある。例えば、フィレンツェの犯罪・司法に関するアンドレア・ゾルジ Andrea Zorziの研究 L'amministrazione della giustizia penale nella Repubblica fiorentina. Aspetti e problemi (Firenze, 1988)、ジュリアーノ・ピント G. Pintoの編集した、貧民・慈善に関する論文集 La società del bisogno (Firenze, 1989)、或いは、同性愛を扱ったL. マルチェッロの論文 L. Marcello, Società maschile e sodomia. Dal declino della (polis) al Principato, Archivio Storico Italiano, 150 (1992)などである。（この他に、ヴェネツィア史研究において、社会史的視点から研究を続けているイタリア人研究者として、ガイド・ルッジェーロ Guido Ruggero[1]を挙げたいのであるが、彼はコネティカット大学に属しているようなので、その研究の環境・姿勢を、イタリア在住のイタリア人研究者と同じく扱うことはできないであろう。）

[1] Guido Ruggero, Vioence in Early Renaissance Venice (New Brunswick, 1980); The Boundaries of Eros: Sex Crime and Sexuality in Renaissance Venice (Oxford, 1985)など。

しかし、そうした社会史の成果を取り入れているにしても、概してイタリア人歴史家は、従来の文献史学の枠を守っている。彼らは、良い意味で保守的、というよりも堅実である。一つには、史料の在り方がこうした研究姿勢に影響しているのではないかと思う。先にも述べたが、少なくとも中世・近世に関する限り、歴史研究は地域研究になる。そしてその為の史料は、各地域の古文書館或いは図書館に所蔵されており、中央の特定の機関、例えばローマの（とは言え、イタリアに「中央」と「地方」の別を設定できるのであろうか？）

文書館や大学に集中している訳ではない。従って、豊富な原史料がごく身近に在って、容易に参照できる（つまり裏返せば、研究対象とする土地に行かなければ、仕事にならないということでもあるが）。そのような環境が、丹念な（場合によっては何年もかけた）史料の分析を第一とする研究態度の背景に在るのであろう。史料による実証を軽視した歴史学の方法論など、そもそも在り得ないことは言うを待たないが、誤解を恐れずに敢えて言うなら、得られた素材（史料）の調理法（視点・分析の枠組み）や盛り付け（結論）の工夫以上に、良い素材の豊富な利用に重きの置かれることの多いのが、イタリア人によるイタリア中世・近世史であると、筆者は考えている。今世紀の前半には比較的イデオロギッシュな色彩の濃い研究も為され、それらのうちにも今なお重要な研究が多々存在するが、現在においては、史料をあるがままに、慎重に検討することが何よりも重要である。その結果得られるものは、案外面白みの無い結論であるかも知れないが、それはそれで意義のあることなのである。

これに対して外国人による研究の場合は、史料による実証性の重視されていることは当然ながら、同時にその視点の秀逸さにひかれるものが多い。近年では、文化人類学等の新しい研究動向も積極的に採り入れられ、研究の枠組みや視点が非常に巧みで新鮮である（設定した枠組みにとらわれかねない危険性も、存在するのではあろうが）。イタリア人の優れた歴史家は勿論多く、その研究は、卓抜な視点と堅実な史料分析とに支えられた理論を展開している。しかし、どうも研究の視野の点では、外国人研究者の方が広いものを持つ傾向が見られるように思う。筆者の研究対象としている14、15世紀のフィレンツェ史に関して — 尤も、これはフィレンツェ史の特殊事情と言えないこともないとは思いますが — は、ここ30年ばかりの間の画期的な研究は寧ろ外国人研究者によるものである。殊に、合衆国とフランスの研究者の活躍がめざましい。例えば、合衆国のジーン・ブラッカー Gene Brucker [1]、フランシス・ケント Francis W. Kent [2]、デイヴィッド・ハーリヒョ David Herlihy [3]、フランスのクリスティアヌ・クラピッシュ=ジュベル Christiane Klapisch-Zuber [4]、シャルル・ド・ラ・ロンシエール Charles de La Roncière [5]等の仕事は、フィレンツェ史を研究する上での基本文献となっている。

[1] Gene Brucker, Florentine Politics and Society, 1343-1378 (Princeton, 1962) ; The Civic World of Early Renaissance Florence (Princeton, 1977)など。日本では、Giovanni and Lusanna. Love and Marriage in Renaissance Florence (California, 1986)が、『ルネサンス期フィレンツェの愛と結婚』在里寛司訳・清水廣一郎解説（同文館、1988）として邦訳されている。

[2] Francis W. Kent, Household and Lineage in Renaissance Florence: the Family Life of the Capponi, Ginori and Rucellai (Princeton, 1977); Neighbours and Neighbourhood in Renaissance Florence: the District of the Red Lion in the Fifteenth Century (New York, 1982)など。親族関係、パトロネイジ、隣人関係等、

人的つながりの側面からフィレンツェ社会を分析している。

- [3] David Herlihy, Medieval and Renaissance Pistoia. Social History of An Italian Town, 1200-1430 (New Haven, 1967); Medieval Household (Cambridge, Massachusetts, 1985)など。フィレンツェ史研究では、クラビッシュ=ジュベルと共同で1427年のカタストを分析した Les Toscans et leurs familles. Une étude du Catasto florentin de 1427 (Paris, 1978)で知られる。
- [4] Christiane Klapisch-Zuber, 'Parenti, amici e vicini'. Il territorio urbano d'una famiglia mercantile nel XV sec., Quaderni storici 33 (1976); La 'mère cruelle'. Maternité veuvage et dot dans la Florence des XIV^e-XV^e siècles, Annales Economie, sociétés, civilisations, 38-5 (1983), La maison et le nom. Stratégies et rituels dans l'Italie de la Renaissance (Paris, 1990)など。前出のハーリヒとの共同研究をはじめ、家族、婚姻、育児、女性などの側面からアプローチを続けている。
- [5] Charles de La Roncière, Florence, centre économique régional au XIV^e siècle, 4 voll. (Aix-en-Provence, 1976); Prix et salaires à Florence au XIV^e siècle (1280-1380) (Roma, 1982)など。

確かに、前世紀以来の大歴史家達 *grandi storici*のうちに数えられるカッジェーゼ、サルヴェーミニ、サポーリ、ロドリーコ、コンティ、フィウミなど、フィレンツェ史研究に重要な業績を残したイタリア人研究者の名を忘れることは出来ない。また、ジョヴァンニ・ケルビーニ Giovanni Cherubini [1]やジュリアーノ・ピント Giuliano Pinto [2]をはじめとして、現在、フィレンツェ史・トスカナ史研究の分野で活躍しているイタリア人研究者も、決して少なくはない。上に挙げた外国人の研究者たちも、偉大な先達、また現代の優秀なイタリア人研究者に依拠するところは大きいのである。しかし、彼らはイタリア人がなかなか扱おうとしないような視点から、歴史を分析してみせる。それは、素材の調理と盛り付けに工夫を凝らした研究である。研究者それぞれに研究の動機や関心があるうが、イタリアの外側からイタリア史を見ているという利と、イタリアの地元の研究者に比べれば、史料との接触は制限されるという不利 — 日本にいる研究者が及びもつかないほど頻繁に、必要な史料を見られるとはいえ — とが、ここに影響しているのであろうか。

[1] Giovanni Cherubini, Signori, contadini, borghesi (Firenze, 1974)など。

[2] Giuliano Pinto, La Toscana nel tardo medio evo. Ambiente, economia rurale, società (Firenze, 1982)など

筆者としては、何も高みに立ってどちらが良いかを論じるつもりはない。イタリア人にはイタリア人の、外国人には外国人の研究上の利点があり、双方が補い合って、イタリア

史学を発展させているのであるし、双方とも、学ぶべき点に富む優れた研究には枚挙の暇がないのであるから。また、今やフィレンツェ史の古典となっている研究にも、ドーレン、ダヴィドゾン、オットカール、ルビンシュタインなどの外国人研究者によるものがあることを願っても、今後こうした良き競合状況は変わらないであろう。

さてそれでは、我々、日本人研究者の研究状況はどうであろうか。イタリア中世・近世史に関する刊行史料の少なさも影響して、近年は、ヨーロッパに留学して何年も滞在し、史料を調査し満を持して、論文を書くという若手研究者が増えている。日本に居ては入手不可能な文献や古文書の実物も、あちらに行けば見ることが出来る。確かに、そうしてこそ、欧米の研究者と肩を並べた研究も出来ようというものである。筆者自身は僅か1年3カ月しかフィレンツェに留学していなかったが、著書・論文を通してしか知らなかった研究者から教えを受けたり、文書館で原史料を存分に見られるというのは、心躍る経験であり、自分の研究上で得たものは本当に大きかった。

ただ、その際に、ヨーロッパから遠く離れ、言語体系も全く異なる地域に住む日本人が、イタリア中世・近世史を研究することの意義とは何か、ということをお問せざるを得なくなることがあった。確かに、日本人であるということで、他の研究者から奇異の目で見られるようなことは無いし、研究者として認めてもらえもする。また実際、フィレンツェには中世史の分野で、地元研究者からも一目置かれている、星野秀利氏という偉大な先達も居た。大塚久雄門下に学んだ彼は、渡欧以来30年間イタリアで、フィレンツェの毛織物工業を主たる対象として — 彼の代表作である L'Arte della lana in Firenze nel basso medioevo. Il commercio della lana e il mercato dei panni fiorentini nei secoli XIII-XV (Firenze, 1980)は、現在、邦訳が進められている — 、中世地中海経済史の研究を続けており、欧米の学界での評価も高かった。そして、イタリアの大学に職を得て、筆者の出会った頃は、ボローニャ大学・フィレンツェ大学兼任教授の職に在った。しかしながら、異質な文化を持つ日本人が、イタリアの、それも現代日本とはおよそ縁遠い中世史を研究しに来るについては、イタリア人に完全に理解してもらえたとは思えない節が、やはりあった。多くのイタリア人にとって、歴史学とはまず郷土のそれである為でもあったろう。プロフェッソール・オシーノ（星野）は、日本人でも別格だったのである。

大義名分を掲げて研究をする必要は無い。イタリアを研究対象とし続けている理由を突き詰めれば、「好きだから」ということに尽きてしまうかも知れない。しかし、それだけでは、やはり淋しい気がする。筆者とて、何か現代日本に寄与するような意義が無ければ学問ではない、と考えている訳ではない。だがイタリア人や、イタリア語を易々と操るアメリカ人やフランス人（筆者の個人的な言語能力の問題もあるが、類似の言語体系を持つ彼らはやはり有利である）に混じって、なかなか読み進めない文書や文献と格闘していると、自分でも納得し、他人をも一応納得させられるような積極的な意義が、次第に欲しくなってくる。かつて前述の星野氏に、「我々がフィレンツェ史を研究する上での利点は何

でしょうね」と尋ねてみたことがある。「何も無いんじゃないか」という答えが、即座に返ってきた。星野氏はその半生をイタリアに暮らし、日本の学界動向にも目を配ってはいたが、研究活動の上では日本人であることを止めてしまっていた。根底には大塚史学の枠組みが据えられていたと思うが、頑ななまでに堅実な文書の分析（彼はイタリア人研究者以上に文書を読めた）によって支えられた彼の研究は、イタリア人と同じ土俵に上がって為されたものであった。その結果、彼は中世フィレンツェの毛織物産業については第一人者と認められ、イタリア内外の研究者から教えを乞われる程になった。1991年に彼が亡くなった際、地元紙は「我が市の歴史家の死去」との見出しで、これを報じたのである。結局、イタリア人に認められるような研究をするには、彼らに同化していかざるを得ないのであろうか。ならば、我々は日本にいる限り、叫びぬものを追い求めていることになるであろう。

無論、イタリア史を研究している限りは、イタリアの研究者達に伍する研究がしたい。そして出来れば、研究の発展に些かなりとも貢献したいものである。その点で、星野氏はイタリア史研究者として究極の選択をした。その道程は決して平坦なものではなかったと聞く（大学に職を得るまでは、夫人共々、ガイドをして生活費を稼いでいたという）が、研究者としては幸福な道であったと思う。だが、日本での職も地位も顧みずに渡欧し、イタリアに留まって（彼が30年間、結局一度も日本へ戻らなかったというのは、伝説になっている）、文書館に通って研究を続ける（前出の彼の著書は15年に及ぶ研究の結晶であった）というのは、誰しもが選べる道ではない。それに、星野氏は認めなかったが、イタリアを外側から見る事が出来る点に、外国人としての研究上の利点が存在すると、筆者は考えている。イタリア人とは異なったメンタリティを持つ我々は、彼らの見落としがちな視角を以て、イタリア史を考察することが可能なのではないかと。フィレンツェ史における外国人研究者の研究とイタリア人研究者のそれとを比較すると、そう思える。実際、清水廣一郎氏は、その研究の場を基本的には日本に持ちながら、適切な史料を取り上げ、それに基づいて論理を組み立てていく方法で、優れた業績を残した。イタリアに住み着かなくとも、必要に応じて史料を調査し、文献を得られれば、イタリア人とは別のスタンスで、イタリア人に伍する研究をすることは可能ではなかろうか。

筆者は、星野氏の道を選択しようとは思わない。研究の場はあくまでも日本である。筆者は日本に生まれ、言葉は勿論、思考もメンタリティも日本の社会の中で育まれた。イタリア人と全く同じ立場で研究をしようとするれば、確かに、これは不利以外の何物でもない。イタリアに行けば、こうした不利はある程度まで解消できる。日本に居るよりは、史料などの面での研究条件は良いし、研究云々を抜きにしても、フィレンツェは居心地が良い。長い間住んでいれば、多少なりともイタリア人と同化していくであろう。しかし率直に言って、日本での職も収入も捨てて（というよりも、日本で職も収入も得てしまったからこそ）、イタリアに住みつ়勇氣は、筆者には無い。ならば開き直って、寧ろ、この立場を

逆手にとってしまおうと思う。幸か不幸か、日本人として生まれ育ってしまったのである。これを利用しよう。日本人意識を振り回す気などさらに無いが、イタリア人以外でなければ取り組みにくい問題設定もあるはずである。勿論、史料の問題のように、克服すべき不利には、相応の対処をしなければならない。出来る限り頻繁に、そして長期的に（時間と金の問題は大きい）イタリアに行くこともさることながら、史料のマイクロフィルムを文書館や図書館に依頼し、日本国内で史料調査が少しでも容易になるようにしたいと考えている。刊行史料の少なさは、何とかこうして補わなければならない。そしてこれについては、まだ僅かずつであるが実行している。所蔵番号さえ判っていれば、日本からでも比較的容易に — 少なくともフィレンツェについては — 文書館にマイクロフィルムを依頼することが出来る。最初に史料ありき。この原則は不変である。実のところ、日本人研究者はこの点で、欧米諸国の研究者に比して不利である。彼らは、大学や研究機関の拠点がイタリアに在る為、ここを基地として比較的容易に現地での史料調査を出来るのであるから。畢竟、史料調査の条件を如何に整えるかが、我々がどこまで欧米のイタリア中世・近世史研究に追いつけるか、という問題にも関わってくるであろう。イタリアに生まれなかった我が身をかこちつつ、日本でイタリア史を研究するようなことはしたくない。

だが同時に、日本で仕事をする限りは、西洋中世史研究者と雖も、日本の「現在」を無視して学問を続ける訳にもいくまい。近代日本の社会・文化の源流の一つをヨーロッパ中世に求められるような牧歌的な時代は、もはや過ぎ去ってしまったが、かつて福井憲彦氏はその著書の題名にもしたように（『鏡としての歴史』）、歴史を鏡として自分の置かれている現在を見直せるということは、日本人がイタリア中世・近世史を研究する場合にも当てはまる。そもそも、研究を進める上での問題意識には、多かれ少なかれ、「現在の自分」の状況が影響を及ぼしているはずなのであるから。そして、筆者としては、これを意識することで、「何故、日本人がイタリアまで来て、イタリア人の何倍も苦勞しながら中世史を研究するのか？」という問い（自問でもある）に、多少なりとも答えたい。結局のところは、後から取ってつけた「答え」かも知れないが、それでも迷ったときにすがるものを確保しておきたいのである。

当初、この小文では、イタリア中世・近世史研究の文献や史料について述べようと思っていた。しかし、結局それは「フィレンツェ史」に限られてしまい、あまり読者の参考にはなりそうにもないので止めた。同時に自分の研究の視野の狭まりを感じ、もう一度、この場を借りて自分の置かれている研究状況を整理してみたくなった。かかる次第で、やや繰り返り言っていた部分も混じった本稿をものした訳である。文章の雑駁なる点は御容赦願いたい。